

保育者を目指す学生たちの造形表現についての 実践報告

藤 井 智 行

A report on the practice of molding and sculpting by students
in early childcare provider programs

by
Tomoyuki Fujii

要旨

幼稚園教育要領等の3つの指針における「5領域」の中の「表現」は、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」とあり、その「内容」では、「生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。」と示されている。

本稿は、「豊かな感性や表現する力」にスポットを当て、2021年度に本学で開講した「図画工作Ⅰ」、「幼児と造形表現」、「図画工作Ⅱ」の授業を通して、保育者を目指す学生が、「豊かな感性や表現する力」をどのように意識し、それらを培ってきたかを、作品や振り返りシートの内容からまとめ、学生の造形表現力をより一層磨いていくために、今後の造形表現の授業における課題を整理したものである。

キーワード：豊かな感性、造形表現、氷山モデル、色、形

1 はじめに

本学の保育学科は1年次前期に「図画工作Ⅰ」と「幼児と造形表現」を、後期に「図画工作Ⅱ」を開講している。「図画工作Ⅰ」では、学生の内なる感情を自画像で造形的に表現させた。授業の目的は造形技術の向上と造形表現能力の把握、他者の表現の理解であった。この「図画工作Ⅰ」と並行して指導したのが「幼児と造形表現」である。「幼児と造形表現」の理解から始まり、その目標と内容、素材を活かした表現方法などの内容を講義と演習で指導し、「幼児と造形表現」の基礎知識や技術を修得させた。後期では、「図画工作Ⅱ」で幼児向けの造形表

現として、「かわいい」をテーマに「壁面構成」や「塑造」を制作させた。

その結果等から、学生たちが保育者としての「造形表現」の特徴や関係性を学ぶとともに、それが保育現場において活かせるよう、「造形表現」等の指導方法を一層深めていきたいと思っている。

2 「図画工作Ⅰ」における「自画像」作品について

保育学科1年32名を対象に、自分の内なる感情を平面的に自画像で表現させた。各自画像の表情は、「喜怒哀楽」をベースにし、背景の「色」や「形」の表現は自由にさせた。また頭髪と顔の「色」も自由とした。この学生作品の「表情」に対して、「感情の種類」、「背景の形」、「背景の色」の特徴をまとめたものが表1である。感情の種類は、「喜」11名、「怒」3名、「哀」3名、「楽」11名、「不安」2名、「優しい」1名、「明るい」1名という結果になっている。

学生は「喜怒哀楽」の感情を「自画像」で表すとき、「背景物」と「背景の色」を意識していた。32名中25名の学生が具象物を描いていることから、「背景物」の特徴として具象物が多いことがあげられる。また、7名の学生が抽象的な形を背景に描いている。表情から読み取れる感情と具象物との関係がよくわかるのが表1の「学生9」（写真1）と「学生24」（写真2）の作品である。「学生9」の作品は自分の好物のクッキーを食べる喜びを表現し、「学生24」の作品は自分の世界観を小さなキャラクターやデザインでまとめる楽しさを表現している。

一方、抽象的な形はイメージの連想から感情を表現している。「学生26」（写真3）の作品は丸のふんわりとしたイメージと表情で楽しさを表現し、「学生17」（写真4）の作品は複数の水滴と表情で哀しさを表現している。このように背景を詳しくみると、その時の感じた体験や感情・イメージが「形」で表現されている。

また、「背景の色」では、「喜怒哀楽」、「優しい」や「明るい」などを表現するときは、自分の好きな色を背景の色として使っている学生が多いことが分かった。中学校美術等で習う「色の感情」から背景色を選んだ学生もいるが、自分の好きな「色」と各感情を繋げて表現している。作品の「背景の色」を全体的に確認したとき、「薄い色調」で表現されている作品が多くみられた。「喜怒哀楽」の感情の中の「怒」以外で29名中17名の感情の中に使われている。一般的に薄い色調はペールトーンと言い、色相の明度を上げた色調であり、「色」は低彩度色になる。特徴として学生たちは、このような色調で表現している。さらに、より「色」で感情を表現したいときは、ポイントとして頭髪の色を変化させ（32名中11名）、感情の「色」として表現していることも分かった。

	感情の種類	背景の形	背景の色	頭髪の色の変化
学生1	喜	微生物	紫色で薄い色調	金
学生2	喜	四葉のクローバー	橙色で薄い色調	✕
学生3	喜	果物	主調色なし	金
学生4	喜	虹	青色で薄い色調	✕
学生5	喜	花	白色	✕
学生6	喜	風船	橙色で薄い色調	✕
学生7	喜	花	黄色で鮮やかな色調	✕
学生8	喜	自然	カラフルで薄い色調	✕
学生9	喜	クッキー	カラフルで鮮やかな色調	✕
学生10	喜	ユニフォーム	暖色で鮮やかな色調	赤
学生11	喜	ひまわり	青系で薄い色調	青
学生12	怒	幾何学模様	赤紫色で鮮やかな色調	赤
学生13	怒	雷	紫色で暗い色調	✕
学生14	怒	ドラキュラ	紫色で暗い色調	紫
学生15	哀	線と面	カラフルで鮮やかな色調	緑
学生16	哀	おにぎり	青色で鮮やかな色調	✕
学生17	哀	水滴	水色で薄い色調	✕
学生18	楽	音符	紫色で薄い色調	✕
学生19	楽	文字	赤色で薄い色調	✕
学生20	楽	渦巻	緑色でにぶい色調	金
学生21	楽	手	黄色で鮮やかな色調	✕
学生22	楽	楽譜	暖色で薄い色調	赤
学生23	楽	料理	黄色で薄い色調	✕
学生24	楽	キャラクター	カラフルで鮮やかな色調	ピンク
学生25	楽	キャラクター	紫色でにぶい色調	✕
学生26	楽	丸	暖色で薄い色調	✕
学生27	楽	丸	黄緑色で薄い色調	✕
学生28	楽	音符	青色で薄い色調	✕
学生29	不安	心電図	カラフルで薄い色調	✕
学生30	不安	点々	カラフルで薄い色調	✕
学生31	優しい	丸と曲線	青色で薄い色調	✕
学生32	明るい	ひまわり	黄色で鮮やかな色調	ピンク

表1 「自画像」内なる感情の表現法

3 「幼児と造形表現」について

「幼児と造形表現」(演習)では各回の授業で講義と演習を行い、教科書として「保育をひらく造形表現」(檳英子 萌文書林¹⁾)を使用している。その中で、大場牧夫の「表現の冰山モデル²⁾」を引用して、「とくに『表現は、目に見えない心の内部を外部に表わし出す』ことです。『表現』には、表現する行為である『表わし』と表現されたものである『現れ』の両方の

意味が含まれている。」と説明し、「造形活動全体を『表現』と捉える視点が、保育者として必要である。」と述べている。また、「保育者は、乳幼児期に適した非言語コミュニケーションの手段を豊富にもち、表現したくなる手だてを状況に応じて提供できる専門性を身につける必要性があり、『造形』はその有効な手だてとなる」という、「造形表現」の意義と教育的効果を示している。

授業中期では「子どもの感性を磨く活動」や「子どもの描画の特徴」といった内容で指導した。幼稚園教育要項等の3つの指針にある「豊かな感性」を子どもの活動にどのように仕組むのかなど、より保育現場を意識した具体的な内容を学ばせるようにした。

授業後期になると「感性・イメージを豊かにする」という内容で、表現方法や素材選びの考え方、環境構成などを指導した。学生に表現方法を教える際は、保育者の目線で幼児に教えることを前提にポイントを押さえ、幼児の成功体験に繋がるように意識させている。「モダンテクニック」を始め、折り紙、ステンシル、版画、動くおもちゃなど、子どものニーズに合わせた表現方法ができるように指導した。

4 「図画工作Ⅱ」について

4-1 「壁面構成」

「図画工作Ⅱ」では、四季を通じて幼児が興味を引き、季節を感じられる「かわいい壁面構成」の制作を行った。作品はペアによる制作も可とし、壁面構成の素材や描画材、表現方法は自由とした。

「写真5」は秋をイメージした作品である。枯れ葉やどんぐりなどを画面に張り付け、秋に行う自然体験活動と結び付けて表現されている。遠近法を取り入れていることで、立体的な作品として捉えることができる。幼児を動物に例え、幼児が「楽しい」と感じ、自らも木の実や落ち葉拾いをしてみたいと感じさせるものになっている。この作品には、人が描かれていなく「ウサギ」「クマ」「リス」がみんなで落ち葉拾いをしている。一匹ずつの動物の表情が豊かで、目や口の位置でそれぞれの表情の特徴である「かわいい」を演出している。

「写真6」はひな祭りと入園をイメージした作品である。ひな祭りが終わると小学校に入学していくという造形表現で季節の変化を表現している。この作品も「写真5」と同様にひな壇を動物で飾り、作品の中で「かわいい」を表現している。この作品はより動物たちと一緒に「ひな祭り」をしたいと思いを強調させるためにひな壇を立体的に制作し、動物たちが飛び出して見える工夫がされている。

「写真7」は夏をイメージした作品である。大きな木に登り虫取りをした体験を造形的に表現している。男の子と女の子からはどことなく会話が聞こえてきそうで、とても楽しそうな場

面である。幼児が子どもの表情やいろいろな虫の絵に興味を持ち、自分たちも「虫取り」に行ってみたいと思わせるものとなっている。作品の大きな特徴は、絵が動くような仕掛けが取り込まれていることである。男の子の下に下がっている紐を引くと、男の子が木を登るという仕掛けがされている。また、「かわいい」を表現するポイントとしては、「色」があげられる。描画画材の持つ、特有の「色」の良さが感じられ、作者が持つ「色」の感性と幼児向けの配色の意識が感じられる。

「写真8」は端午の節句をイメージした作品である。ゾウの鼻から飛び出したこいのぼりが、色とりどりの花の上を飛んでいる。こいのぼりは色紙、ゾウと花と小さな人形は布、雲は綿で表現されている。作品の特徴でもある素材と表現物の大きさが印象的である。布で立体的に作った小さな花を画面にたくさん散らすことやぬいぐるみのような人形を作り画面に貼ることで、「かわいい」と華やかさを表現している。

4-2 「塑造」について

図画工作Ⅱでは「壁面構成」の他に加工粘土を使い「塑造」の造形表現を行った。この授業も幼児の興味を引き、「かわいい」と感じられるものをテーマにした。学生は可塑性のある粘土の特徴を活かし、「形」や「色」などで立体的に表現した。31人の学生作品をみると具象物で「かわいい」を表現しており、その中でも動物に例えたものが58%（18人）と最も多かった。（表2）制作された動物には、「クマ」「アルパカ」「パンダ」「ペンギン」など、多くの動物が表現されていた。

動物の「塑造」を制作した学生18人の中で、「クマ」を制作した学生が6人いるだけで、他の12人は違う動物で「かわいい」を表現していた。学生一人ひとりが幼児を理解しながら「かわいい」を具象化する対象を選んでいった。

学生作品の「形」の表現の傾向として、具象物をキャラクター化し、特徴的な箇所をデフォルメし、全体的に立像や座像ともフォルムに丸みがあり、パーツにも丸みがあった。（「写真9」）

また、「色」の表現の傾向には薄い色調の作品が多かった。今回使った加工粘土は、色の練りこみや色の後付けがしやすく、マーブル模様で「かわいい」を表現する作品もあった。「形」や「色」以外の表現として、ホログラムシートやグリッターを使いキラキラと輝かせる作品や、もこもこした毛糸や綿を使い質感を変えた作品もあった。（「写真10」）幼児に寄り添った

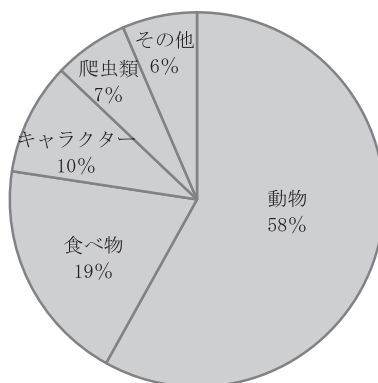


表2 塑造の種類

具象物について、「形」「色」「素材」などを工夫し「かわいい」を表現していることが分かった。（「写真 11」）

4-3 図画工作Ⅱ「振り返りシート」について

作品制作終了後に振り返りシートを使い、「かわいい」をどのように表現したかを振り返えらせ、回答のあった 30 人の学生についてまとめたものである。質問は以下の通りである。

質問 1 あなたが「かわいい」と感じる場所はどのようなところか（表 3）

質問 2 あなたが「かわいい」と感じるものは何か（表 4）

質問 3 あなたが幼児期に「かわいい」と感じたものは何か（表 5）

質問 4 造形で「かわいい」を表現した感想

質問 1 の回答を表 3 にまとめた。「色」と回答した学生が一番多く 54%で全体の半数以上を占めている。次に多い回答は「形」で 33%であった。「その他」の回答は 13%で、「素材」や「感触」などといったものだった。この表から「かわいい」を幼児に感じさせるために「色」を意識していることが分かった。

次に、質問 2 の回答をまとめたのが表 4 である。「動物」と回答した学生 30%、「キャラクター」20%、「子ども」17%、「ふわふわしているもの」10%、「その他」23%となった。「その他」の回答の中には、「淡い色のもの」「キラキラしたもの」などがあつた。

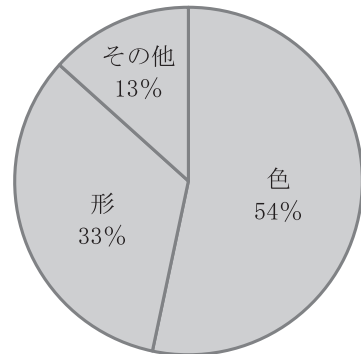


表 3 「かわいい」と感じる場所

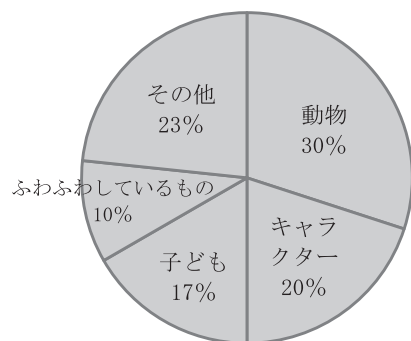


表 4 「かわいい」ものは

この表の「動物」と「キャラクター」については、学生一人ひとりが「かわいい」として捉えているものが違う中で、幼児に向けた「かわいい」を念頭に造形で表現していた。

質問3の回答は表5にまとめた。「人形」が40%と最も多く、続いて「ぬいぐるみ」26%、「キャラクター」17%、「その他」17%であった。「その他」には、「鞆」や「服」などの回答があった。すべて具象物で抽象的で感覚的なものは回答になかった。質問4の感想にも書かれていたが、自分の幼児期の体験を基に「かわいい」を作品の中に取り入れている学生が複数いる。

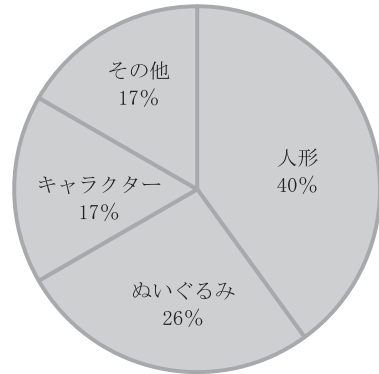


表5 幼児期に「かわいい」と感じたもの

質問4の「かわいい」を表現した感想をまとめると、以下のような内容であった。

・自分の「かわいい」を表現することは、自分でポイントを掴んで表すことができるが、幼児に「かわいい」を感じさせる造形表現は難しく、様々なアイデアと知識が必要なのがこの授業を通して感じる事ができた。

・1つの動物でも作り手が違うと表現も違う。大人と幼児では対象が違うので表現が変わるということに気づけた。

・「かわいい」ものは幼児期から好きだった。造形表現するのは簡単にできると考えていた。しかし、制作するにつれて私が考える「かわいい」が幼児の「かわいい」になるのか不安に思った。造形表現の難しさを感じた。

5 造形表現の今後の課題

2021年度の授業を行って、学生たちの保育者を目指そうとする強い思いが、造形表現を行う姿から見受けられた。幼児を養護・指導する保育者として、学生たちの造形表現する力をさらに磨いていくことが大切であると感じ、今後の造形表現の授業について次のとおり課題を整理した。

まず1つ目は、学生に自分が身に付けた造形表現方法を理解させ、幼児の造形表現に繋げて

いくことである。「図画工作Ⅰ」では自分の内なる感情を自画像の背景の形や色で表現させた。「図画工作Ⅱ」では幼児に向けた「かわいい」をテーマに制作させた「壁面構成」や「塑造」では、具象物に「顔」を入れて表現している。これは、幼児期の描画によく見られるアニミズム的表現を入れたことになる。アニミズム的表現で具象物に「顔」を入れることで、幼児の表現方法に寄り添い、幼児にわかりやすく表現を伝えている。このように自分が行う表現方法を理解し、どのようにしたら幼児に効果的な表現方法を伝えられるか、授業を通じて指導していかなければならない。

2つ目に造形に関する知識の幅をさらに広げていかなければならない。表現方法や技術面に関しては、授業の中で指導しているが、「色」や「形」がもたらす心理的效果までは詳しく教えていない。「振り返りシート」にもあったように、学生は造形表現するとき「色」と「形」の重要性を感じている。配色計画で同一色相や類似色相、対照色相や補色色相などの配色が相手にどのような心理的效果をもたらすかは授業の中で説明したが、色彩心理のほんの一部である。幼児の表現として色が与える心理的效果を知っておくと、幼児に対する造形表現を指導する際のねらいや表現方法として役立てることができる。また「形」から受ける効果も同様であり、幼児の生活と表現を繋げることが大切であると考えている。さらに、学生たちの造形表現に関する知識を増やし、色々な視点から造形表現を指導できる保育者を育てていきたいと考えている。

3つ目は問題解決能力を育む授業を仕組むことである。授業で制作をするときは、アイデアデッサンをし、自分が表現したいコンセプトを図として表させている。経験や授業者が用意した資料などが乏しく、アイデアを出せない学生がいるが、保育現場では、幼児は保育者が想定していない表現をすることが想定される。このような幼児の豊かな表現力を培うことが大切であると思う。

今回の授業に例えると、「幼児が『かわいい』と感じる表現」がこれに当たる。「かわいい」というテーマを深く分析することで、表現方法も変わってくる。大倉典子の「感性価値としてのかawaii」では、「かわいい」を「形」や「色」や「大きさ」などで研究した内容が書かれている³⁾。また、入野野宏の『『かわいい』のちから 実験で探るその心理』には、「かわいい」について科学的な分析結果が論じられている⁴⁾。学生がこの他に様々な「かわいい」についての資料を使い、自分自身で課題を見つけ解決していければ、より深く造形表現について学ぶことができると思う。

6 終わりに

保育者をめざす学生たちの造形表現に関する知識や表現力等の実態を知り、保育者として幼

児に係るために必要な知識やスキル等を考えることができた。平成30年4月1日に「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」及び「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が同時に施行され、「5領域」などに共通化が図られ就学前教育体制は整った。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つに、「豊かな感性と表現（心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲を持つようになる。）」⁵⁾が示されている。

保育者をみざす学生を指導する幼児の造形教育の指導者の1人として、学生がより幼児の造形表現を指導できるよう、これからも研究して行きたいと思う。

引用・参考文献

- 1) 槇 英子, 「保育をひらく造形表現」, 萌文書林, pp11-12 (2018)
- 2) 大場牧夫, 「表現原論」, 萌文書林 (2000)
- 3) 大倉典子, 「感性価値としてのかわいい」, 横幹第9巻第1号
- 4) 入戸野宏, 「かわいいのちから」実験で探るその心理」, 化学同人
- 5) 「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」(2017)

【資料作品】



自画像 表1「学生9」(写真1)



自画像 表1「学生24」(写真2)



自画像 表1「学生26」(写真3)



自画像 表1「学生17」(写真4)



壁面構成「写真5」



壁面構成「写真6」



壁面構成「写真7」



壁面構成「写真8」



塑造「写真9」



塑造「写真10」



塑造「写真11」